

発達障害者の障害受容の心理社会的プロセス に関する調査研究

中 村 恵 子

新潟青陵大学看護学部看護学科

A Research Study on the Psychosocial Process of Disability Acceptance of the People with Development Disabilities

Keiko Nakamura

NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY FACULTY OF NURSING DEPARTMENT OF NURSING

要旨

本研究は、就労移行支援事業所に通所する発達障害者の障害受容の心理社会的プロセスを明らかにすることを目的とした。発達障害の診断を受け、就労移行支援事業所に通所する発達障害者8名を対象として、半構造化面接を行った。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて面接内容を分析した結果、5つのカテゴリーと12の概念が抽出された。

中退や離職、鬱病といった状況に陥った発達障害者が<このままではいけないという思い>から<支援機関探し>を行った結果、事業所に通所するに至っている。障害特性と行動特性を照合したり、仕事や人間関係上のトラブルなどの経験を再解釈したり、障害をもつ身近な人と自分の似ているところを見つけたりして、<発達障害であることの認識>を深めている。コアカテゴリーである<発達障害であることの認識>は、<適切な自己コントロール>や<自分についてのメタ認識>にも影響を与えている。

キーワード

発達障害、障害受容、心理社会的プロセス、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

Abstract

The purpose of this study is to clarify the psychosocial process of disability acceptance of the people with development disabilities who are going to employment transfer support offices. A semi-structured interview was conducted with 8 people with development disabilities who were diagnosed with development disabilities and were going to employment transfer support offices. As the result of analyzing the result of the interview with a modified grounded theory approach, 5 categories and 12 concepts were extracted.

The people with development disabilities who were in troubles like dropout, disemployment, and depression, etc, <searched for supporting organizations> <because they wanted to get out of their current situations>, and eventually started going to the offices. They are deepening the <recognition of the development disabilities> by checking the disability characteristics and behavior characteristics, reinterpreting their experiences like troubles in working and human relationships, and finding similarities with familiar people with disabilities. The <recognition of the development disability> that is a core category also has impacts on the <appropriate self-control> and the <self-metacognition>.

Key words

development disabilities, disability acceptance, psychosocial process, modified grounded theory approach

I はじめに

障害受容についての理論には、「段階論」と「価値転換論」がある。前者は障害を受け入れる「過程」について論じたものであり、後者は障害を受け入れた「理想的な状態」とはどのようなものかを論じたものである¹⁾。

「段階論」については、日本において、Fink²⁾とCohn³⁾のものが紹介されている。本田らによれば、両者とも、ショックを受け、現実の認識ができない状態から、感情的な落ち込みを通して適応的な段階に至る大筋でほぼ一致している⁴⁾。一方、「価値転換」を障害受容の中心的要素として位置づけたのは、Dembo⁵⁾とWright⁶⁾の理論である。DemboとWrightの価値転換論は日本の障害受容論に大きな影響を与え、障害受容の主要な定義に、価値転換が要素として含まれている¹⁾。上田は、「障害の受容とはあきらめでも居直りでもなく、障害に対する価値観(感)の転換であり、障害をもつことが自己の全体としての人間的価値を低下させるものではないことの認識と体得を通じて、恥の意識や劣等感を克服し、積極的な生活態度に転ずること」⁷⁾と定義している。

また、南雲は、脊髄損傷患者の障害受容について、従来の障害受容理論が障害受容を障害者の個人的な問題としてしか捉えていないことを批判し、障害者が自らを受け入れるには、障害者個人の障害受容プロセスに加えて、「社会が障害者を受容する」過程も必要であると論じている。南雲は、障害者が背負う苦しみには、「自分の中から生じる苦しみ」と「他者から負わせられる苦しみ」の2つがあるとして、それを区別するべきであるとしている。前者の苦しみは、障害者が取り組むべきもので、それと折り合いをつけようとするプロセスが自己受容であり、後者の苦しみは障害者が受容する必要のないものである。障害者への蔑視や社会的排除を是正して障害をもった

個体を包含していこうとすることが社会的受容であり、障害の社会受容により障害者の自己受容も促進されると捉えている^{8) 9)}。岩井は、障害の「種類」も「程度」も、個々の障害者を取り巻く環境も多様であり、自らの障害を切なく感じることを糾弾されるべきではなく、受容は強要されるべきものでもないものであり、障害者個人だけでなく、社会もまた、障害者が障害ゆえに差別される状況を除去する責任を負っているとしている。岩井は、「障害受容とは、障害者個人が、様々な障害の性質、障害者を取り巻く人間関係、全体社会と言った諸要素と相互作用する過程を、そこで生じる肯定的・否定的感情も含めて受け入れることができることではないか」¹⁾と述べている。発達障害の障害受容も、単なる個人的な問題ではなく、社会的な問題でもあると捉えることができる。

2005年に施行された発達障害者支援法に基づいて、各都道府県に発達障害者支援センターが設置されている。センターの就労相談において、生活自立ができていない、障害特性の認識不足のために職場にうまく適応できない、二次的障害としてメンタル上の問題を抱えているなど、就労支援を受ける前段階として取り組まなければならない問題のある相談者も少なくない¹⁰⁾。発達障害者の就労支援には、自己理解と障害受容がある程度できていることが必要であり、発達障害者は、障害受容以前に、自分の障害に気づきにくいということがあり、気づくこと以上に障害を受容することは難しいことであるとの指摘がある¹¹⁾。木谷は、成人後、自閉症スペクトラム障害(ASD)と診断された人を対象とした調査研究から、「ASDの人の『自分』を尋ね出すプロセスは、『おぼろげな自分』を抱えつつなんとか他者と関わって生きようとする中で動き出していた」¹²⁾と述べている。しかしながら、発達障害者の自己理解と障害受容の重要性を示す文献^{11) 12) 13)}は見られるものの、

社会との関わりの中で、どのように障害に気づき、障害特性を認識して、自己理解を深めていくのかについてのプロセスについては、十分に示されているとは言えない。

本研究では、就労移行支援事業所に通所する発達障害者の障害受容の心理社会的プロセスを明らかにすることを目的とする。障害受容の心理社会的プロセスの可視化は、障害受容を促進する支援にもつながるものである。

II 研究方法

1. 研究対象者

発達障害の診断を受け、A就労移行支援事業所に通所する発達障害者8名を対象として面接調査を実施した。対象者は全員20代であり、男性5名、女性3名であった。障害の内訳は、アスペルガー症候群4名、注意欠陥・多動性障害（ADHD）3名、広汎性発達障害1名である。

2. データ収集方法

平成26年からA事業所に複数回訪問し、活動の様子を観察や通所者との交流を重ねた。平成28年1～4月の期間に、A事業所内のプライバシーを確保できる個室を提供してもらい、調査を実施した。「発達障害であると感じてきたまでの経緯とその後の変化」について、半構造化面接法による聞き取り調査を行った。面接時間は、約30分～1時間であった。研究対象者の許可を得て、聞き取りの内容を録音した。

3. 分析方法

質的帰納的研究である、木下が提唱する修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）¹⁴を用いて、データを分析した。音声データから逐語録を作成し、テーマに関連があり、類似しているデータを同一の分析ワークシートにまとめ、ワークシートごとに、1つの概念を生成した。概念を分類し整理して、カテゴリを生成し、カテゴ

リー間の関係から、コアカテゴリを決定した。M-GTAに精通している研究者から、分析結果についてのスーパービジョンを受けて、カテゴリや概念の名称を一部修正した。

4. 倫理的配慮

A事業所の長に、文書と口頭で研究の趣旨を説明し、研究協力を依頼した。その際に、よいデータを得るためには、面接の前に通所者との交流があった方がよいという助言を得て、A事業所への訪問を重ねた後、研究対象者を紹介していただいた。面接に当たって、研究の目的や方法、参加の任意性、不参加による不利益はないこと、匿名化による個人情報保護の保護、データの処理について、事業所長及び研究対象者それぞれに、文書と口頭で説明した上で、同意書に署名を得た。データは研究以外の目的に使用しないこと、途中で辞退可能であることを説明した。なお、この研究は、新潟青陵大学の倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：2014006号）。

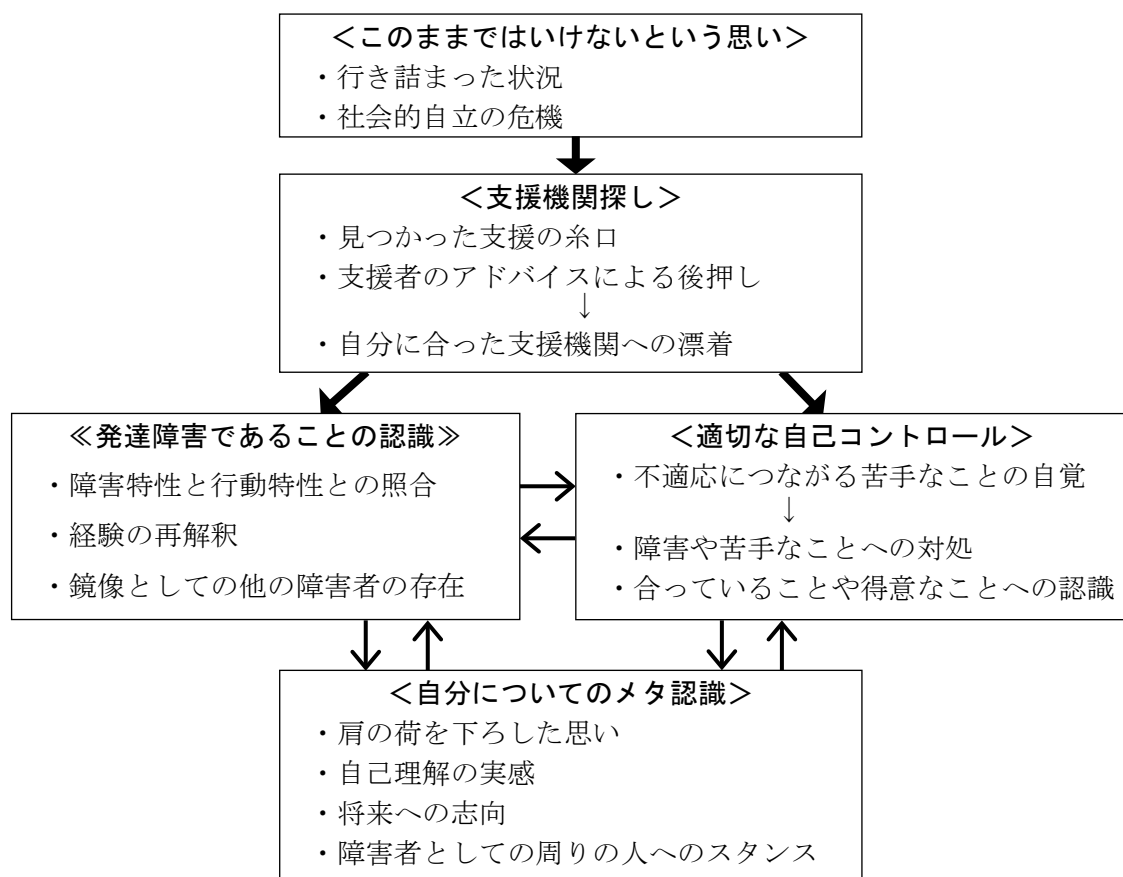
III 結果・考察

図1は、分析の結果を示したものである。本研究では、5つのカテゴリと12の概念がみい出された。ストーリーラインは、以下の通りである。《 》はコアカテゴリ、〈 〉はカテゴリ、[]は概念を表す。

青年期において、退学や就職における失敗、鬱病やひきこもりといった[行き詰まった状況]に陥った発達障害者が、[社会的自立の危機]を感じて、〈このままではいけないという思い〉から、[見つけた支援機関の糸口]を契機にして、役所やハローワーク、発達障害者支援センターなどの[支援者のアドバイスによる後押し]を受け、[自分に合った支援機関への漂着]として就労移行支援事業所に通所するに至るという一連の〈支援機関探し〉を行っている。通所には事前に診断が必要であるため、入所者は幼少時に発達障

害と診断を受けていたり、うつ症状から医療機関につながり発達障害と診断されたり、入所に当たって診断を受けたりしている。診断された発達障害名の「障害特性と行動特性との照合」をしたり、学校生活や就職における失敗経験や人間関係上のトラブルといったこれまでの「経験の再解釈」をしたり、他の通所者や友達、親戚など身近な人を「鏡像としての他の障害者の存在」として捉えて障害の特性や自分と似ているところを見つけたりして、自分の特性のどこが障害なのかを理解しようとして「発達障害であることの認識」を深めている。また、「不適応につながる苦手なことの自覚」をし、自分に合った「障害や

苦手なことへの対処」について理解することとともに、自分に「合っていることや得意なことについての認識」により、「適切な自己コントロール」が段々とできるようになる。行き詰まった理由を合点したり、何とかやっていけそうだという安心感を得たりしたことで「肩の荷を下ろした思い」や、自分の特性や変化に気づいたことで「自己理解の実感」をもち、就職時の障害枠の利用や自己の活かし方などについての「将来への志向」と「障害者としての周りの人へのスタンス」といった今後の方向を模索して、「自分についてのメタ認識」を深めるに至る。



《》はコアカテゴリー、＜＞はカテゴリー、・は概念を示す。
 → は変化の方向、→ は影響の方向を示す。

図1 発達障害者の障害受容の心理社会的プロセス

1. <このままではいけないという思い>

<このままではいけないという思い>は、[行き詰まった状況]、[社会的自立の危機]の2つの概念で構成される。鬱病や離職などの行き詰まった苦しい状況を経験しながらも、社会的自立の危機を感じて、このままではいけないという思いをもつことを表すカテゴリーである。

[行き詰まった状況]は、人間関係や仕事上のトラブルから不眠や鬱病になったり、退学や離職となったりして、先が見えなくなった状況を表す概念である。「大学生活で、体調をちょっと崩しまして。…気疲れといいますが、…不眠になったり、何か、ズキズキこう、頭が痛かったり。何か落ち着かない気分といえますか。…病院にちょっと、受診しまして」、「一度入院したことがあって、その時に、そういう障害があると診断されたんですね。あの、鬱で、精神科の方に入院した時。…バイトで、ちょっと細かい先輩のパートさんがいて、いろいろ毎日言われることに結構その、苦しくなっちゃって」、「学生の時に、何かうっかりミスとか、あとレジの業務だったんですけど、バイトで、何か忘れて、何か1個忘れちゃうんですね。…お仕事に支障があって、ちょっと体調とかも崩して、1回辞めて。…地獄っていうか、アルバイトの時は。…接客業は無理だと思って、…掃除のパートに入ったんですけど、そこでも人間関係がちょっと。…あの子ちょっとねみたいな感じ」、「取りあえず大学やめたっていうことが、本当、向いてなかったの、本当にもう、きつくてきつくて、課題がまずあれだったので。…自分はもう最初のころの段階で2年くらいやった時に、もう多分限界を感じてたんですけど、…結局3年まで頑張りましたが、4年にどうしても上がれなくて、…『もう1年、じゃあ頑張っ』みたいなことを言われました。もう折れましたね。1回折れてしまいました、そこで」、「機械をこう、穴開ける作業があって、…ちょっと不注意で、ちょっと手を一緒にやっちゃっ

て。…『治ることは治るけど、遅いから』って言われて、早い方がいいなと思って手術して、その後、会社に行ったら、…『今回けがして、もし2回あったら怖いから』って言われて、『残念ですけど』みたいな感じで言われちゃって、…解雇された後はちょっと落ち込みましたね」、「大学生の時に、普通に人間関係でちょっと鬱病になったんですけど。半年だか1年だか休学しつつ、卒業して、就職したんですけども、就職先がちょっと厳しくて。で、悪化させてしまって、職業辞めてっていう形になったんですけど。…口頭指示と電話と、…自分でも何でできないのか、理解できなかったから。分からなかったです。…対策が打てないんで、もうそりゃ悪化しますよ、鬱病もみたいな。怒られるもんみたいな。対策が打てないのがやっぱり一番あれですね。…就活から就職するまでの間が、鬱病が悪化したんですけど、その辺が、就職活動もしんどかったし、やっと受かったと思ったらしんどかったし。あの辺が二次障害の鬱病だったのだと思いますね」というように、苦しかった心情が語られており、現状をどのように乗り切れればよいのかが分からないことのつらさが伝わってくる。

[社会的自立の危機]は、退学や就職活動の失敗、離職、鬱病、ひきこもりなどの状況の中で、このままでは社会的に自立できないという危機感をもつことを示す概念である。「もう大学もやめまして、もう家にいるわけにも、いさせるわけにはいかないということになりました、じゃあちょっと、何か少しずつできることを探しにということもあるし、ちょっと病んでたっていうのもありまして」、「卒業したんですが、そこからちょっとまあ、なかなか就活も、おぼつかない」、「入院した後何もしなかったの、その、何もしないっていうのを、自分がちょっと嫌だなと思ってた」、「1年引きこもったから、もうこれ以上は引きこもれないなっていう。…1年さすがに自堕落に過ごす、さすがにこれ以上引きこもると人間として、い

や、駄目だなみたいな。…自分自身が、危機感っていうんですかね。半年ぐらいめっちゃ楽しかったんですけど、それを過ぎたぐらいから、半分過ぎて折り返し地点だなと思って。で、自分を振り返ってみると、『あ、これ、人間の生活じゃないわ』みたいなという言葉に、このままではいけないという気持ちが表現されている。

2. <支援機関探し>

<支援機関探し>は、[見つけた支援機関の糸口]、[支援者のアドバイスによる後押し]、[自分に合った支援機関への漂着]の3つの概念で構成される。支援を求めて何らかの機関につながり、支援者からの助言や複数の施設での体験などをもとに、自分に合った支援機関にたどりつくまでの過程を示すカテゴリーである。

[見つけた支援機関の糸口]は、支援を求めて、関係機関にまずはつながることを表す概念である。「診断を受けてすぐに、地域活動支援センターに行ってみたくて」、「市役所の福祉課ですね。鬱病で就職してなかったんで、そういうのを支援してもらえるところ、取りあえず役場に行ってお話を聞いてもらおうかなみたいな感じで」、「発達障害者支援センターを調べて、『ああ、そういう施設があるんだ』と思って。電話して、『ちょっと私が発達障害かなって自分で思うんですけど』ってアポ取って」というように、最初の窓口や支援のきっかけは多様である。

[支援者のアドバイスによる後押し]は、本人のニーズや特性に合った支援者の助言によって、次の一步を踏み出す様子を表現した概念である。「(障害者就業支援センター)行って面談したら、『A事業所がいいんじゃない』って言われて」、「(発達障害支援センターとハローワークの人が)もうごり押しっていうか、言ってきたんですよ。…『B型とかA型もあるけど、いや、A事業所ですかね』みたいな。…すごいこう、PRしてたから、『ああ、じゃあ、

PRのところ行ってみるかな』と思って」、「(障害者就業支援センターとA事業所)両方行って、どっちか向いている方があったら、ちょっと通ってみたらどうなんじゃないか』みたいなことを、(発達障害者支援センターの方に)お話しただいて」、「市の福祉課の人と保健師の人と、障害者就業・生活支援センターと職業センターの職員さんとで、みんなに集まってもらって、『次、どこ行きます』みたいになって。…『精神障害の方の就職支援施設か、発達障害専門だったらA事業所ってところがあるよ』って教えてもらって」というように、支援者の助言が次の一步につながっている。

[自分に合った支援機関への漂着]は、自分の目標や特性、物理的な距離、施設の特色などを考慮して、様々な機関の中から最終的に自分に合った支援機関を決定することを表す概念である。「地域活動支援センターに行ってみたくて、何か自由に過ごしているだけのところだったので…やっぱり就活したかったので、ちょっとハローワークに行ってみたりもして、…ハローワークでも、何か自分がうまく説明できなくて。…カウンセラーの先生から『若者サポートステーションに行ってみたら』って言われて。…そこで就職活動したいっていう話をしたら、何か『こあサポートの方がいいよ』って言われて、…そこに行って面談したら、…で、こちらに通うことになりました」と、自分に合った支援機関を求めて、複数の機関を漂流する様子が語られている。「働きたいというのが目標だったんで、逆にこっち、A事業所の方が、そっちの方の意欲は合っているんで、それを選びました」、「自分がまだ分からないことがいっぱいあったので、…まだ学ばなきゃいけないことたくさんあるのかなと思ひまして、…硬かった考え方があったのと、…広い視野になってくるというか、そういうもありまして、A事業所の方が向いているのかなと思ひました」、「距離的にも。…あのまず、本当、行きやすさといえますか、やっぱり」というよ

うに、自分と施設の両面を考慮して、最終的な支援機関を決めている。

3. 《発達障害であることの認識》

《発達障害であることの認識》は、プロセス全体のコアカテゴリーであり、[障害特性と行動特性との照合]、[経験の再解釈]、[鏡像としての他の障害者の存在]の3つの概念で構成される。障害特性やこれまでの経験、他の障害者の存在を手がかりにして、自分の特性のどこが障害なのかを理解していく様子を表すカテゴリーである。

[障害特性と行動特性との照合]は、発達障害の障害特性と自分の行動特性のどこが当てはまるのかを照らし合わせることを示す概念である。「先生が障害だって言ってたんですけど、その、障害があるって知らなかったの、…アスペルガーを調べ始めて。でも何か当てはまる部分と当てはまらない部分があったんで、障害なのかなっていうのは思っていましたね」、「何かネットで調べてみたんですよ。20代物忘れが激しいって。…ADHDっていう症状と私がぴったり当てはまって…」、「チェックリストにチェックして行って、何個以上だと発達障害ですみたいなのが一応あって。チェックしていったら、もう発達障害ですになって、『ああ、そうだな』と行って…」といったように、インターネットで調べたり、チェックリストを用いたりして、障害特性と自身の特性のどこが合っているかを確かめている。

[経験の再解釈]は、学校生活や就職における失敗経験、人間関係上のトラブルといったこれまでの経験を発達障害という視点から捉え直し、再解釈することを示す概念である。「小学校、中学校、高等学校全部、1年生の時にはちゃんと行っているのに、2年生になってから行けなくなって、だんだん不登校になっていくので。そういう癖があるというか、それはその、障害のせいだったのかなと。…障害だと思ったら納得できたので、自分の中では、それは良かったかなと思います」、「耳の聞こえ

が悪いわけじゃないんですけど、ちょっと言語理解に支障が若干あるんですよ。それがもうずっと引っ掛かってて、小学校の時から。聴覚検査では何も出ないもんですから、何だろうなと思ってたんですけど、これかと思って。結構、困難さはあったと思います。…連絡事項の聞き漏れ、聞き漏らしがとにかく多くて、…友達に聞かないと、明日の遠足の持ち物絶対分かんないみたいな。まあ、書いてあれば割と分かるんですけど。でも、整理整頓が苦手みたいな特性もあるんで、どっかいっちゃうんですよ。それかみたいな」、「今まで仲良くなってきたやつらはみんな、最後けんかしてしまっってというのが大体でしたね。ちょっと自分が頑固だったっていうのが、後々気づいたことだったんですけど、異常にそこにこだわっていたっていうのは。…今思えばですね。その時は、『あいつ、絶対悪いな』と思っているところがありまして」などのように、これまでの経験を振り返り、新たな解釈と気づきを得ている。

[鏡像としての他の障害者の存在]は、他の通所者や友達、親戚など、身近にいる発達障害者のもっている特性と自分の特性の似ているところを見つけ出し、障害について理解することを示す概念である。「自分と同じように、口頭指示が苦手というか。もしくは、自分以上に、空気の読めない人がいるとか、そういうことがありまして」、「やっぱりここにいると同じ障害をもっている仲間んで分かり合えるじゃないですけど、ちょっと同感する部分はありますね。だから同じような行動をしているじゃないのかなみたいな、のは思いますね」、「いろんなことがもう見えてきて、…話を聞いたりだとか、周りの通所生の方々を見てきて気づいたことを言うと、『あ、彼は間違いなくADHDじゃないか』っていうのがはっきりしましたね」、「姉のだんなさんが発達障害若干あるんですよ。…『忘れ物が多いんですよ』みたいなことを言うと、『ああ、俺も、俺も』

みたいな形になったりするんで」というように、身近な障害者の言動を客観的に見聞きし、自分と重ね合わせて捉えている。

4. <適切な自己コントロール>

<適切な自己コントロール>は、[不適応につながる苦手なことの自覚]、[障害や苦手なことへの対処]、[合っていることや得意なことについての認識]の3つの概念で構成される。自分の苦手なことと得意なことが分かり、それらに応じた自己コントロールをすることができると表すカテゴリーである。

[不適応につながる苦手なことの自覚]は、発達障害の特性として、不適応につながる苦手なことは何なのかを自分自身で認識していることを示す概念である。「この事業所に来て気付いたんですけども、やっぱり口頭指示は、苦手な方でしたね」、「やっぱり連絡事項聞き漏らしているから、やっぱり耳、駄目なんだなっていうのも。そういうのがこう、自覚できたんで、それは非常に助かったですね」、「自分の得意、不得意というのが本当、何かよりはっきりしたような気がしますね。やっぱり手先を使う作業はちょっと苦手だったり。あと、スピードはあるんですけども、仕上がりが雑というか、ミスもあったり」、「もともとある雰囲気の中に入るのが苦手なので。誰もいない時間に入っちゃえばそんなに問題ないんですけど」、「音に反応してしまうというか、大きな音に。で、何か野球部の叫び声みたいなやつに弱いっていか、そういう音が苦手です」、「非常に敏感でしたね。ちょっとしたことでもう何かこう、ぐわっとなってしまうというか。…他の人なんかは笑って済ませられるようなことで、いつまでも、『それ違うよな』っていう、何か考え方、硬い感じですね。…融通が利かないみたいなところもありまして。…こだわりが強いついていうか」、「人にも依存しがちなところがあるなって最近気づいて、『ああ、やばいな』って思いましたね」という言葉に、障害特性として苦

手なことが明確になったことが表現されている。

[障害や苦手なことへの対処]は、不適応を起こさないために、障害や苦手なことについての対処方法を獲得することを示す概念である。「社会通念じゃないですけど、何か人間関係のルールみたいな、あるじゃないですか。それをみんな明文化してもらって。図とかも書いていただいたんで」、「やっぱり上下関係だとか。しゃべり方とか、こういうところ気を付けないと駄目だよみたいな。あと、ちょっと飲みを断るにも、ちゃんとした言い方というものがあるからって。そういうようなことをしっかりやっていかないといけないかなって、思っていますね」、「『電話はしなくていい』って言われて、『あ、できないもんな』と思って。『できなかったもんはやらなくていいんだ、やったー』みたいな」、「時間を決めるっていうのは大事なんですけど、寝る前に、スマホだとか、ゲームだとかはやらないとかっていうようなことも教えられてきて、最近ではもう全然めっきりゲームもやらなくなりました。はまりますね。1回やっちゃったら、もう終わるまでは。依存しがちですね」というように、社会的なスキルの習得や不適応を起こしやすいことを回避することによって対処しようとしている。「やっぱり気持ちはどうしても落ち着かないっていうのがありまして、あ、そうか、これ、睡眠剤として使えばいいんだみたいな、ワイパックスを半錠出されて、1錠だとすごく効き目があるので、半錠ほどで、まあ、すっと寝れましたね。処方です。指導の下に。そういうところも、少しずつ変わってきています」、「服薬したらよくなって、すごいなと思って。…前、行った病院で、『ストラテラとコンサータ2種類、ADHDの薬であるよ』って言われて、最初ストラテラ飲んで、今、コンサータを飲んでます。やる気が出るんですよ。私の場合ですけどね。だるーいみたいな。…あれが年中だったんで。…小さいとき、ずっとですね。物心

がつく頃からですよ、多分。で、飲むと、…しょうがないから行くかぐらいのやる気は出るので、まあ、すごい楽にはなったな」と、専門医の指導の下で、自分に合った服薬をしている。

[合っていることや得意なことについての認識]は、これまでの経験や新しい活動の中で、自分に合っていることや得意なことの認識が明確になることを表す概念である。「伝票の入力がすごく合ってたと思います。あまり苦痛じゃなくてできたので。で、結構続いたので、それは合ってたと思うんですけど」、「プログラムを作ること自体は、問題なかったですね。割と合っていたと思います。割と楽しかったし」、「ここ来て、木工とかで、そういうのは楽しいっていか。多分、合うのかなとは思いますが。何だろう、何か作りたいっていか。…やってて楽しいのはあるんで」、「手作業みたいなのを授業とかで、向き不向きが分かってくるんで。…あとは意外だったのが『郵便カードの仕分けが早いんですね』って言われて。『得意だったんだ。やったことなかったもんな、郵便の仕分けみたいな』』というような認識が語られている。「1つのことに関していろんなことを考えられるとかっていう性質が強いみたいなので。やっぱりそういう意味で何か感動は、普通ってどうなのか分からないんですけど、大きいんじゃないかなとは。…普通ちょっと違うってだけで、かなり恩恵はあると思います。…まあ、普通の人、退屈なんだなと思えるようなことでも、何か、俺、全然やっていける。ああ、そう。そういうふうに見えたり発展したりできるのは、やっぱり強いんじゃないか、強みなんではないかな」と、障害特性が自分の強みでもあるという気づきが表現されている。

5. <自分についてのメタ認識>

<自分についてのメタ認識>は、[肩の荷を下ろした思い]、[自己理解の実感]、[将来への志向]、[障害者としての周りの人へのスタン

ス]の4つの概念で構成される。安心感や自己理解を実感し、就職や周りの人との関わり方など、将来のことについて考えていることを示すカテゴリーである。

[肩の荷を下ろした思い]は、発達障害であることに合点がいき、無理をしなくてもよい状況になり、安心感を得ることを表した概念である。「『そうだ、そうだ』ってチェック入るとそうだったんで。『ああ、そうだ』みたいになったんですけどね。ああ、ちょっと楽になりましたね」、「自分は、やっぱり何かおかしいと思った。これで合点がいったって、すごく安心しましたね」、「『ああー、気持ち的にはラッキーだな』っていう、(診断を)受けてから。何かなりたくて行ったら変ですけど、ある程度調べて、下調べして行ったんで、そこで、『いやー、ちょっと君、発達障害じゃないね』って言われるよりは、診断をこうね、ばっちりこう、もらった方が、あの、ああ、何ていうの、安心っていか、「他は今まではみんな周りが健常者で、自分がこう、何かちょっとおかしいのかなっていう感じもしたんですけど、それがちょっともうおかしいって言ったら、ちょっと失礼ですけど、そういう子たちがいっぱいいて、ちょっと安心だなんて」、「(A事業所に)入ってこう、ふぬけてしまったというか、逆に言えば、気楽になったというか。今までこうちょっと、背伸びをしている感じはありましたんで、肩の荷が下りたなっていう感じ。…本当ぎりぎりのラインでもう何か今までやってきまして」という言葉から、楽になりほっとした気持ちが伝わってくる。

[自己理解の実感]は、支援者の助言や新たな経験から、自分の特性や変化について気づくことを示す概念である。「以前より何かその、自分のことを説明できるようになった気がします」、「逆に気づく、今まであんまりよく触れてないのもここで体験できたりはするんで、それがありがたいなって。例えば、郵便仕分けとかも。…手、器用じゃないんですけど、…指

の使い方とか、もういっぱいあるので、毎日我慢してやっているんだけど、新たなスキルが増えていく感じが何か今まで経験してない分、ありますね」、「(髪を)とかしたりしているんですけど」、「寝癖あるよ」とか言われるんで、やっぱり気にするようにはなりましたね。今まではあんまりしなかったんですけど、「自分に気づくと自分にとって何が必要なんだろうってことが見えてくると思うんですよね。…最近はどうもの見方が全然違って。…結構かなり、安定しています」など、自分についての気づきが語られている。

[将来への志向]は、今後、予想される困難点を考慮して、どのような形で就職するのか、自己を活かしていくのかなど、将来について考えることを表す概念である。「将来的な、就職のためにも、やっぱり本当に自分の得意、不得意なところが分かっていた方がいいので。本当にその点においては、このA事業所に来てよかったと思います」、「実はもう最近まで迷ってしまっていて、最近ようやく、障害者枠でやっていこうと決めたくて」、「障害者雇用を利用して、苦手なところを伝えてから就職できる」、「基本的に自分のことを分かってもらえないときついところがどうしてもやっぱり今後あるので、障害者枠で、お金に関しては確かにですけど、それよりも何かもっと別のもの、強みがあればやっていけるんじゃないかなとはやっぱり思っています」と、将来についての考えが語られている。

[障害者としての周りの人へのスタンス]は、親や親戚、友達など、周りの人に対して、自分の障害についてどのように開示するのか、あるいはしないのかについて決めることを表現した概念である。「親があまり納得してないから、お医者さんにこういう診断を出されたっていう、まあ、客観的な証明じゃないけども、…医者に言われたからしぶしぶ認めたいなところはありますね」、「うちも親戚も、ある程度、学歴が高いといいますが、ちゃん

とした職業に就いていまして。…仮に障害者雇用で雇用されても、(親戚には)あんまりおっぴらにはせずに」、「友達、1人、2人、3人ぐらいは。お出掛けしたら割引になるんで、いろんなところが。それで、言っといた方がいいかなと思って。(手帳を)何で持っているのとかって、ちょっと面倒くさいんで、最初に言っておくかなと思って」と、相手にどのように受けとめられるかを考慮して、周りの人との関わり方を考えている。

IV 結論

南雲は、障害受容における障害の社会受容と障害者の自己受容の重要性を指摘している⁹⁾。その両方が不十分であることによって、退学や離職、鬱病、引きこもりなどの二次的障害を生じ、発達障害者の社会的自立が阻まれていることが分かった。

[障害特性と行動特性との照合]や[経験の再解釈]、[鏡像としての他の障害者の存在]によって「発達障害であることの認識」が十分になされることが、発達障害者が主体性を取り戻す上で重要なポイントとなっている。そのため、例えば、文中にあるような「チェックリスト」の活用、これまでの経験を振り返る「語り」の重視、ピア・サポートを促す働きかけなどの支援がなされることが望まれる。

支援者の助言や事業所での活動など、社会との関わりの中で、「発達障害であることの認識」が深まったり、「適切な自己コントロール」ができるようになったり、「自分についてのメタ認識」がなされたりしている。これらのカテゴリーは、相互に影響を及ぼし合う関係である。このような一連のプロセスを通じて、発達障害者が肯定的・否定的感情も合わせて受け入れられるようになって心理的安定がもたらされており、社会的自立が促進されることにもつながっている。インタビューから、支援者は、本人が自身の特性に気づくような活動を

取り入れたり、「髪がはねている」などの普段の様子について指摘したり、電話対応など自分には向かない仕事はしない、依存しないように寝る前にはスマホやゲームをしないなど、[障害や苦手なことへの対処]の具体的な方法について助言をしたり、分かりにくい人間関係のルールを明文化して示したりしていることが分かった。一人一人の特性をしっかりと理解して、<適切な自己コントロール>ができるように支援を行っていくことが極めて重要である。

なお、本研究の限界として、A就労移行支援事業所1機関に通所する発達障害者を対象としているため、このような機関での支援を受けていない発達障害者は、異なった障害受容のプロセスをとると予想させることが挙げられる。今後の課題として、様々な支援機関も視野に入れ、検討していく必要がある。

謝辞

本研究にご理解とご協力をいただきましたA就労移行支援事業所及び通所者の皆様に、深く感謝いたします。

なお、本研究は、平成26～28年度科学研究費補助金基盤研究(C)(No.26381340)の助成を受けて行ったものである。

文献

- 1) 岩井阿礼.障害受容概念と社会的価値—当事者の視点から—.淑徳大学研究紀要. 2011;45:239-250.
- 2) Fink SL. Crisis and motivation: A theoretical model, Archives of physical medicine and rehabilitation. 1967;48:592-59.
- 3) Cohn N. Understanding the process of adjustment to disability: Journal of Rehabilitation. 1961;27:16-18.
- 4) 本田哲三, 南雲直二, 江端広樹, 渡辺俊之

.障害受容の概念をめぐって.総合リハビリテーション.1994;22(10):819-823.

- 5) Dembo T, Leviton G, Wright BA. Adjustment to misfortune: A problem of social psychological rehabilitation. Artificial Limbs. 1956;3(2):4-62.
- 6) Wright BA. Physical Disability-A Psychological Approach. New York: Harper &Row; 1960.
- 7) 上田敏.障害の受容—その本質と諸段階について.総合リハビリテーション.1980;8(7):515-521.
- 8) 南雲直二.脊髄損傷患者の障害受容—stage theory再考.総合リハビリテーション.1994;22(10):832-836.
- 9) 南雲直二.障害受容の相互作用論-自己受容を促進する方法としての社会受容.総合リハビリテーション.2003;31(9):811-814.
- 10) 土岐淑子,中島洋子.高機能広汎性発達障害の就労支援.児童青年精神医学とその近接領域.2009;50(2):122-132.
- 11) 桜井美佳,柴田珠里,小林信篤編.平成24年度厚生労働省障害者総合福祉推進事業 就労移行支援事業所のための「発達障害のある人の就労支援マニュアル」.2-3.神奈川:社会福祉法人横浜やまびこの里;2013.
- 12) 木谷岐子.自閉症スペクトラム障害の成人当事者が抱える「自分」—M-GTAを用いた質的研究—.北海道大学大学院教育学研究院紀要.2015;122:1-25.
- 13) 田中康雄監修.藤森和美,辻恵介編.発達障害とキャリア教育.東京:金剛出版;2014.
- 14) 木下康仁.M-GTAグラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究の誘い—.東京:弘文堂;2003.